

新しい大学院科目「社会科教育実践の探究Ⅱ」「社会科教育方法の探究Ⅱ」

社会科教育専修・鴛原 進

1. 授業の概観

前学期「社会科教育実践の探究Ⅱ」は木曜日2時限目、後学期「社会科教育方法の探究Ⅱ」は火曜日4時限目に実施した。それぞれ同名の「社会科教育方法の探究Ⅰ」「社会科教育実践の探究Ⅰ」を加えた8単位の中から、4単位が社会科教育専修の修了要件として課されている。そのような科目である。

授業の概要は、前学期「社会科教育実践の探究Ⅱ」が、社会科教育実践上の諸決定の根拠となる授業理論の考察を通して、優れた授業の分析と説明の演習を行うとした。後学期「社会科教育方法の探究Ⅱ」が、諸国の社会科教育を素材にして社会科教育方法の理論的・実践的課題を考察するとともに、社会科教育方法研究に必要な基礎理論や授業理論の考察、近年の社会科教育研究について論ずるとした。

実際は、両科目に共通する題材として、テキストを用いて、それを材料としながら、社会科教育授業理論に関する授業を行った。テキストは、Hazel Whiteman Hertzberg“*Social Studies Reform 1880-1980*”Social Science Education Consortium, 1981を用いた。今年度は、当該テキストの第1章を読み終えたところである。

2. 授業評価法

両科目とも、大学院の受講生3人に科目等履修生を加えた4人の受講であった。少人数であるため、授業評価は、自由記述したものを提出してもらうことにした。授業評価の依頼は1月31日(火)に行い、2月14日(火)までの回収とした。

3. 授業評価結果

大学院の受講生に自由記述にて授業の評価をしてもらった。次のようである。

授業を通じて、アメリカの社会科教育の成り立ちを通して、当時設立されていた委員会の報告や論争を学習した。そこから、現代の社会科教育で議論されている内容との結びつきを考えることが

できた。具体的には、英文の指示名詞の意味や使用されている単語の意味を議論した。その結果、19世紀後半から議論されている内容と現在社会科教育で議論されている内容には共通することがあると理解できた。資料を重視する教育や歴史的に考えることのできる生徒の育成、デューイの道具主義など、どれが正しいかは別としてどれもメリットデメリットがあり、総合的に社会科教育を考えていく必要があることを学ぶことができた。また、現在も問題視されている歴史に対する関心の低下などが当時から議論されていることは興味深い。当時から改善することができていないと考えることも可能であり、他方で、この歴史的関心を高める必要性はどの時代においても必要であると考えられること可能である。教育現場で、社会科を教えていく身にとってみれば、考えなければならない課題であると認識できた。

英語を訳しながら、議論を行う方式をとったため、進行が慎重になってしまった。訳者らの英語力の低かったことが大きな原因であったと考えられる。そのため、議論が次時に流れることが多く、訳者が前時の議論や訳を行ったときの意図などを忘れてしまっていたこともスムーズな進行を妨げたと考える。受講者の英語力(相対的に、私を筆頭に、本年の受講者は低かったと考える)を把握し、担当する文章量を短くして複数人にするなど改善を行うことで、よりスムーズな進行を行うことができると感じられた。また、議論した内容を訳者が代表して、修正した訳を再び共有する。これにより、考えた内容を忘れることも少なくなり、より深く議論し直したりでき、スムーズな進行を助けることができると考える。本授業では、年間の見通しをあらかじめ立てた状況から見通しを修正する機会があまりなかったと感じられたため、随時修正することが好ましいと考える。

私たちが訳し始める部分の前に、大学院の先輩方が訳していた。それらの方々が訳した内容をはじめに共有してくださると、議論しやすかったように感じられた。また、上記の内容とも重なるが、前時の議論した内容を再び共有することで、より議論が効果的になったと考えられる。

海外に行ったことがない私にとって、アメリカで経験した話を聞くことができる機会は有意義で

あった。 sacramentと松山の関係性や、アメリカ社会の制度・特質など聞いていて興味深かった。これらの話を組み込むことで、アメリカを経験したことがない私を議論に自然と溶け込みやすくしていた可能性もあると感じられた。

(以上Aさん)

本音を言うと、最初は「何で英語を訳さないといけないんだ」という気持ちがありました。社会科のあゆみを辿ることで、一体今に何が活かせるのかという疑問があったからです。しかし本文の意味を追っていくにつれて、私の疑問に対する答えが少しずつですが見えてきました。時代の流れ・要請に沿う形で、社会科という教科は形成されていったこと。そのあゆみを辿ることで、今社会科に求められていることを見出せるのではないかということが、本文の訳を進めていくうちに実感できてきたからです。今年の授業は本文の内容理解が途中で終わってしまったので、消化不良な感じが否めません。本文の内容全ての内容理解ができたならば、私の疑問に対する答えも大きく違って来たかと思えます。授業の組み合わせ上、難しいところではあると思いますが、来年度は、一年を通じて一つの文章を終わらせることができれば、受講生も私以上に授業の有用性を感じられるのではないかと思います。

(以上、Bさん)

英訳を作ることに対しては抵抗がなかったが、内容吟味が薄かったように感じる。英訳を重視するのであればもう少し身近な内容にする方がわかりやすいと感じた。内容吟味を重視するのであれば、もう少し予備資料などを自分で勉強すればよいと思った。授業のスタンスがどちらなのか確認しないまま一年たってしまい少し残念なことをしてしまったと感じている。英語は付かず離れず接していきたい。

(以上、Cさん)

4. まとめ

この授業に対して、大学院の受講者3人は、全体的には肯定的な評価をしてくれている。有益なことが多かったと、(かなりのリップサービスをしてくれているとは思いますが・・・) 評価してくれている。

他方、この授業の趣旨と実際については、改善すべき意見として多くの受講者が指摘している。教職大学院的なものを大学院の授業に要求されている昨今、研究と授業の乖離を感じざるを得ない。

それで、果たして良いのであろうかと自問自答している。

また、報告者は、社会科教育という多様性に満ちた教科やグローバル学習などを専門にしているからかもしれないが、多様性を肯定している。多様性を肯定しなければ、その組織は硬直化していくと考えている。本研究科でいえば定員問題として直ぐ顕在化してこよう。

多様性を保証し、あるいは求めながらの、この必修科目「社会科教育実践の探究Ⅱ」「社会科教育方法の探究Ⅱ」はいかにあるべきなのであろうか。報告者には荷が重いと感じられる。が、担当者として授業を実施し続けていかなければ、解決しないことである。